寄稿

講座「大阪社会労働運動史」の挑戦

ー大阪労働学校の再建をー

谷合　佳代子
（公益財団法人大阪社会運動協会・大阪産業労働資料館（エル・ライブラリー）館長）

1．はじめに

2012年10月2日に開講した本講座は、エル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）という小さな図書館にとってはじめての試みである。その概要は、図書館が所蔵する一次資料を活用して１年間にわたるゼミ形式の講義を行い、電子メールを使った「通信教育」も取り入れ、受講生どうしの討論を大いに喚起しようというもの。

受講料２万円を払えば労働者でなくても受講生になれる講座なので、これを「労働者教育」と銘打っているわけではない。しかし、元々は「賀川豊彦以来の伝統、大阪労働学校の再建を」を裏スローガンとして企画したものである。

チラシの惹句（じゃっく）を抜粋しよう。

【市民はいかに労働問題や社会問題の解決に関わってきたのか、歴史に学び、現代の社会労働問題に取り組む頭と心を鍛える「市民による市民のための市民の歴史講座」。教材はエル・ライブラリー所蔵の過去100年間にわたる労働・社会運動の文書、写真、映像などのリアルな資料。1年間の講座を履修し、リサーチ･ペーパーを提出した受講生には修了証書を授与】

まずエル・ライブラリーの沿革を述べる。当館を設置運営する公益財団法人大阪社会運動協会は1978年に『大阪社会労働運動史』の編纂と、そのための資料収集を主な目的として労働組合によって設立された。1999年に『大阪社会労働運動史』第8巻を発行し、2000年からは大阪府の委託を受けて府の労働図書館も運営していたが、2008年7月に橋下徹知事によって廃止され、補助金も全廃された。

年間収入の７割を失うという存亡の危機に瀕したわけであるが、100年の大阪社会運動の史料を次世代に伝えるため、わたしたちは2008年10月にエル・ライブラリーを立ち上げた。以来４年間、全国の市民・労組のカンパとボランティアに助けられ、運営を続けている。

以下に、講師である篠田徹早稲田大学教授からの提起を受けて始めることとなった本講座について、開講に至る経過、意義、狙いを大阪の労働者教育の歴史をひもときながら述べる。

2．大阪の労働者教育の歴史：戦前

そもそも、心のスローガン「大阪労働学校」とは何か。詳細は特集①を参照いただきたいが、大阪労働学校は1922年６月、無産階級のための生きた大学をうたい、総同盟（日本労働総同盟）との連携下に、賀川豊彦を出資者・校長として創立された。1937年までの15年間に、入学者の延べ数は2000人余り、延べ修了者は約1300人。関西の労働・無産運動の活動家を多数輩出した。四分五裂し対立を繰り返

す労組の争いから距離をおいた中立的な運営を貫いたという。「本邦随一の本格的労働学校たる名にそむかない」（協調会『労働年鑑』昭和10年版）輝かしい軌跡を記したが、1936年の二・二六事件以後、社会労働運動への弾圧はいっそう厳しく、また労働組合そのものが戦時体制へと再編されていくのに伴い、労働者教育運動も衰退の一途をたどった。大阪労働学校を支え続けた講師陣を擁していた大原社会問題研究所が1937年２月に東京に移転し、これを大きな痛手として大阪労働学校は閉鎖となった。

３．大阪の労働者教育の歴史：戦後

敗戦後、連合国軍総司令部（GHQ）の占領下において労働者教育の必要性が叫ばれ、労働組合が雨後の竹の子のように結成される時代を迎えた。

戦前戦後を通じて、労働者教育は主催者別に大きく①労働組合、②官公庁、③使用者団体、④学術研究・文化団体や大学、⑤政党の５つに分類できる。大阪において特筆すべきは、①②④であろう。本稿でも主にその３つについて述べる。

まず①について。1947年の２．１ゼネスト敗北をきっかけに、それまでのストライキ攻勢一本槍の活動方針を反省した労働組合は、労働者教育を重視するようになった。既に1946年から労働組合主催による教育活動が始められており、大阪では1947年４月以降、労働組合や使用者団体、大阪府労働部労政課による労働教育が実施されている。

その中で、労働組合の枠を超えた講座として1947年８月１日に開講された「大阪労働大学」が注目される。大阪労働大学は大阪地方労働組合連絡協議会（大阪のほとんどの労組が加盟する緩やかな協議体）と中央労働学園大阪支所が運営母体となり、大阪地方労働委員会と大阪府、大阪市が後援した。労働組合員を対象に、テーマは労働組合の機構と機能、労働組合の民主的運営、日本労働運動史、労働法制、経済学、労働者の世界観、などと多岐に亘った。講師も労働組合の役員や参議院議員、GHQ係官、大学教授と、多彩であった。

一方、1948年５月10日から総同盟大阪連合会が第２回「大阪労働学校」を開校していることが、臨時聴講生募集ビラから確認できる。このビラによると、講義は６月から７月にかけて約１カ月半、週に２回午前午後を通して行われ、受講生は総同盟の組合員に限り、講師には総同盟の幹部および大学教員が就いている。講義内容は「世界労働運動史」「社会思想史」「賃金論」「唯物史観」「日本経済論」など、戦前の大阪労働学校の講義内容を彷彿とさせるものである。この講義は昼間なので受講生が少なかったと見えて、８月には夜間講座に変更されている。

総同盟が分裂し1950年に総評が誕生して以来、1989年の連合結成まで、右派の総同盟・全労会議（1964年に両者が統一して「全日本労働総同盟」＝同盟）と左派の総評が長らく対立を続けた。その間、労働者教育もそれぞれの系列の文化団体と労組との連携で行われることが慣習となった。

大阪同盟は結成以来毎年、「大阪同盟労働学校」を開催し、1989年の解散年度に至るまで49期に及ぶ講座を開いている。加盟組合の若手組合員を対象とするこの講座には、組合幹部や大学教授が講師として名を連ねている。卒業生は卒業論文を提出し、第１席から佳作まで入賞者が表彰されている。

総評大阪地評はいくつもの文化団体を友誼団体とし、大阪総評講師団を組織して加盟組合に講師を推薦するなど積極的に教育文化活動を支援し続けてきたが、地評独自での労働講座を開いてはいなかった。1965年２月に第１回短期労働大学講座を独自に開いているが、大阪地評は基本的に独自の常設的な講座を開くことはなかったという。

４．現在まで続く「大阪労働大学講座」

官公庁によるものは何種類かあるが、そのうち、現在まで続く「大阪労働大学講座」を紹介する。

1951年度から学識経験者と労使からなる「労働教育諮問委員会」が「大阪労働学校」を開催していたが、労働問題に対する知識水準が高まるに従い、より高度な労働教育に対する需要が増えたため、1953年には労働省・大阪府・大阪市の三者共催で労使関係の合理的安定に資するよう、労働組合員及び企業における労務担当者等を対象に「大阪労働大学講座」が開催されることとなった。主催団体の数や形態を少しずつ変えながら現在まで続き、2011年度までに3455名が修了している。

第１回の講座から現在まで続く主な特徴を挙げると、

①１年間におよぶ夜間講座
②大学教員や専門研究者を講師とする
③講義内容は労働法・労働経済論が中心
④講座の終了時には試験や論文提出が義務づけられ、修了証書授与式を開催

時代とともに労働組合員の受講生が減り、現在では企業の人事労務担当者が多く受講し、社会保険労務士の姿も目立つようになっている。すでに2002年度に「個人のキャリア

アップのために受講する人が増えている」と講師から指摘されていた。

5．科学者・学術団体による労働者教育

戦後の科学者運動の一つとして1946年に設立された民主主義科学者協会（民科）関西支部（後に大阪支部が独立）による労働大学やその他の文化講座が開かれているが、労働運動の後退や1950年のレッドパージによる弾圧を受け、1955年には事務局を解消している。

一方、1953年２月、総評系の労働者教育団体として「関西勤労者教育協会」が設立された。1954年12月には加盟組合24単組、講師陣110名に達した。1955年の「関西労働学校」の開校などをへて順調に発展を続け、受講者は最高1100名に達したという。

しかし、総評大阪地評は勤労者教育協会の運営について「協会は決して特定政党の下請け機関ではない」(『1963年度一般経過報告書』)はずとの批判を寄せ、1965年に至って同協会から脱退し、新たに短期労働大学講座を発足させることになる。

同盟系の労働者教育団体としては、1969年に設立された「関西労働文化教育研究所」（関労研）が挙げられる。これは全国文化運動協会大阪協会（大阪全文協。1956年設立）内につくられたものである。社会労働学校の年2回開校や、労使セミナー・国際シンポジウムの開催、海外交流などを行っていた。連合結成に伴って設立された教育文化協会に合流するべく大阪全文協は1998年に解散し、関労研も2008年12月に解散した。

6．連合大阪結成以来、現在の労働者教育

以上見てきたように、「大阪労働学校」という名の労働者教育講座はこれまで複数存在しているが、最も早くにその名称を冠したのは1922年に賀川豊彦が創設した大阪労働学校である。戦後いくつも存在した大阪労働学校にその伝統を引き継ぐという自覚がどれほどあったのかは定かではないが、連合大阪が結成されたときに、大阪同盟はその伝統を受け継ぐことを強く主張したという。『拓く創る：連合大阪結成10周年記念誌』によれば、大阪同盟は戦後、賀川豊彦の労働学校を引き継ぐ形で大阪同盟学校を継続していた。「連合大阪は、このバトンを『ユニオン・カレッジ』（校長・連合大阪会長）と名付け、90年9月21日、『高野山宝城院の２泊3日』コースとして受け継ぎ、毎年、30 ～ 40人の受講生を送り出してきた」（p28）という。

2002年の第13回まで開催されたユニオン・カレッジについては、2003年にそのありかたが見直されることとなり、2009年8月から「次世代リーダー養成講座」をスタートさせた(『連合大阪20年史』)。2012年のカリキュラムを見ると、連合大阪退職幹部による労働運動史の講座を皮切りに、大阪労働協会、関西生産性本部など外部団体の労働セミナーも組み込んで半年にわたって計画されている。

なお、2009年頃から東京の教育文化協会と連携をとって連合大阪独自の教育講座を持つことが検討されていたが、実現には至っていない。

7．社会労働運動史に特化したエル・ライブラリーの講座

ここまで大阪の労働者教育の歴史を概観して、やっとエル・ライブラリーにたどり着く。大阪で常設されている労働教育講座は大阪労働協会の大阪労働大学講座が最も長い歴史をもち、戦前の大阪労働学校の形式を引き継いではいるが、講義内容から「労働運動史」が消えて久しく、受講生にも組合員の姿が少なくなった今、かつての大阪労働学校の面影をそこに見ることはできない。労働組合の幹部や活動家を育てる講座ではなくなっているのが現状である。

当館の講座が大阪労働学校の再建を密かに謳(うた)っているのは、形式のみならずその目的において社会労働運動の現実問題に対処するための講座と銘打っていることからもうかがえるだろう。労働大学講座と当館の講座との違いは、前者が取り上げない「歴史」に主題を特化する点だ。そのうえ、アーカイブズの一次資料を使うというユニークな講座である。労働組合の若手活動家を対象に、歴史に学ぶ姿勢を持って欲しいとの思いから始めたものである。

当法人が財政難に陥って以来、貴重な文書記録や博物資料をなんとか大勢の人に知ってもらい、働く人々の宝物といえる資料の数々を次の世代に伝えたいとの思いがいっそう強くなっていた。書庫に眠らせているのではなく、見て触れて活用してもらってこそ資料は生きる。ライブラリーの宣伝のためにも、資料に触れて歴史を実感できる講座を行いたいと思い続けていたが、予算と時間的余裕のどちらも捻出するのが難しかった。そんな折に早稲田大学の篠田徹先生から、「全労済協会から労働者教育のための助成金を得たので、ぜひ大阪で実施したい」とのお申し出があったのが、本講座の始まりである。

講座はキックオフしたばかりなので、１年間の講義内容の詳細は受講生と話し合いながら決めていくことになる。10月現在で決まっ

ていることは次の通り。

●前期（10月～３月）：座学と調査。３月までに各人が執筆テーマを決める。

第1回講義テーマ「太平洋運動史における京阪神圏」。

第2回以後、個別事例紹介（例：戦前の大阪市電労働者のストライキ/ 戦前大阪の芸妓スト/ 生協が生まれる頃/『蟹工船』が読まれた時代/ 戦前の借家人争議/ 安保闘争/ 三池争議/ 勤評闘争等）。

●後期（4月～9月）各自が執筆するリサーチ・ペーパーのブラッシュアップのための講評会を数回開催するほか、メールやメーリングリストによる遠隔討議・指導を行う。

8. 受講生の熱い思い

本講座に応募した人は14人。病気などによるキャンセルを除いて11人の受講生によって始まった。20代から70代まで、現役労組専従者や退職幹部、大学非常勤講師、会社員、などなど老若男女とりまぜた受講生が長文のコメントを寄せてくれたが、紙幅の都合によりその熱いコメントの断片のみ紹介する。

○賀川豊彦が結成した「共益社生協」の役員をしていたのでその経過に興味がある。

○ユニオンの活動に参加し、研究してきたが、労働史は知らないことが多い。大阪の運動の到達点と限界、展望を考えたい。

○新しい若者労働組合運動を作りたい。これまでの運動から何を引き継ぎ、何を変えるか、整理したい。

○労働運動の現場実践に携わっているものとして、研究者も入ったこうした研究の共同作業の場が確保される今回の企画を喜んでいる。

○労働問題の関わりから離れて久しいが、労働運動のリーダーを系統立った運動史に位置づけたい。他方、排除されてきた人たちの中にこそ示されている社会労働運動の本質を自分なりに見極めたい。

○今、労働争議に直面している。ことあればいつでも飛び込める脚力を身につけたい。

○女性、障害者、在日朝鮮人等さまざまなマイノリティの運動と労働運動との関わりなども考えていきたい。

○人生の第４コーナーを曲がり、直線があとわずかな時、過去に自分が関わった医療運動について整理したい。

○高度成長期の44年間働き続けてきた民間企業を退職し、エル・ライブラリーにボランティアとして関わっている。

○「変革」「チェンジ」などの合言葉で、過去から変えることが何かすばらしいことのように評価されがちだが、変えるべきもの、変えてはいけないものをきちんと歴史から学びたい。

○自分のライフワークとして調べつづけてきたことを完成させたい。いつも女性運動の軸から歴史を見てきているので、きちんと体系的に全体の流れを学びたい。

9. 終わりに

本講座が大阪労働学校の再建と呼ぶに相応しいものになるかどうかはメンバー全員の奮闘にかかっている。講師、受講生、ライブラリーのスタッフが紡ぎ出す、歴史への視線と現実政治への照射がどのように化学反応を起こすのか、どこまでも伸びてゆくリゾーム（ドゥルーズとガタリ『千のプラトー』より）を想像しながら、新しい労働者教育を拓く道のりをこわごわと手探りで、しかもなお楽しみながら歩んでゆきたい。

＜主な参考文献＞

大阪社会労働運動史/大阪社会労働運動史編集委員会編; 第1巻 - 第9巻. 大阪社会運動協会, 1986－2009

大阪労働学校史：独立労働者教育の足跡/法政大学大原社会問題研究所編. 法政大学出版局, 1982

社会・労働運動大年表/法政大学大原社会問題研究所編 新版. 労働旬報社, 1995

大阪労働大学講座50年のあゆみ. 大阪労働大学講座協議会, 2003

労働者教育の諸問題/藤林敬三, 末弘重夫共著. 労働文化社, 1949

WEBサイト「財団法人大阪労働協会」の「平成24年度（第60回）大阪労働大学講座」http://www.l-osaka.or.jp/ork/pages/pageA.html

日本の労使関係と労働者教育/江上寿美雄[著] 労働政策研究･研修機構, [2003] http://www.jil.go.jp/institute/kokusai/documents/egami.pdf

「全文協」文化運動40年：私の忘れ得ぬ思いを/越智俊之著. 関西労働文化教育研究所, 2005

大阪全文協40年活動抄史1956 ～ 1996/全国文化運動協会大阪協会編 全国文化運動協会大阪協会, 1996

一般経過報告書；1951年度－1968年度 日本労働組合総評議会大阪地方評議会

一般活動報告書 ；1966年度－1989年度 全日本労働総同盟大阪地方同盟

1947 ～ 1949年の総同盟資料（中江綴15）［文書ファイル］エル・ライブラリー所蔵